

談話における「ネ」の機能

—仙台方言の説明的場面で使用される談話標識としての機能—

琴 鍾 愛*

目 次

1. はじめに
 2. 先行研究
 3. 仙台方言における「ネ」の機能
 - 3.1 引き込み
 - 3.2 情報共有確認
 - 3.3 念押し
 4. まとめと今後の課題
-
-

1. はじめに

筆者は現在まで談話標識の出現傾向から各地域の談話資料を分析し、談話展開の方法に地域差が認められることを明らかにした(琴2005など)。今回はこのような談話標識の出現傾向に注目するのではなく、その一つ一つの談話標識が実際の談話の中でどのように働いているのか、その機能を考察する。本稿では、まず研究の第一歩として仙台方言の説明的場面で最も多用される形式である「ネ」を取り上げ、その談話における機能を考察する。

ここで、本研究における「談話」「談話標識」という概念の定義や対象範囲について述べておく。談話とは文より大きい言語単位で、あるまとまりを持っている文の集合である。本稿では、一人の

* 忠南大学校 日語日文学科 講師、日本語学専攻

1)本稿では多くの地域の中から、まず仙台方言、その中でも説明的場面で最も多用される形式である「ネ」を取りあげたものである。今後、地域を広げ、その地域の談話資料で多用される談話標識の機能について研究していきたいと考える。

話者が相手の情報要求に対して説明を行っている説明的場面を用いる。説明的場面を取り上げる理由は、「ネ」が説明的場面で最も多用される形式だからであり、会話のやり取り場面に対し、比較的解析が容易だったからである。ただし、説明的場面といっても、会話の中での一場面であることには変わりがなく、ここでの方法や結果は、今後、会話のやり取り場面の考察にも参考になると考えられる。

談話標識とは、談話の中で情報内容とは直接関わっていないが、「情報の内容理解を助ける」「会話者間のやり取りをよりスムーズにする」「会話者間の人間関係を円滑にする」(西野1993)など、話者が効果的な情報伝達のため使う形式であり、品詞という既存の文法カテゴリーを超え、様々な言語形式から成り立つものである (Fraser1990、Schiffirin1987)。

日本語では、接続詞、間投助詞、終助詞、副詞、感動詞、応答詞などが談話の中で談話標識として重要な役割を果たしているが (田窪1992、西野1993、三牧1993、メイナード1993)、本研究では仙台方言の説明的場面において、特に、高い頻度で使用される談話標識である「ネ」を取り上げ、その機能を明らかにする。

2. 先行研究

一般に「ネ」は文法レベルでは感動詞、終助詞、間投助詞として、各々「親しみを込めて呼び掛けたり念を押ししたりする時にいう(感動詞)」「文末に付けて、念を押し、意味を強め、あるいは軽い感動を表す(終助詞)」「文節の終りに付けて相手に念を押し、あるいは軽い感動を表す(間投助詞)」のような機能を果たしているとされる(『日本国語大辞典』)。しかし、実際の談話の中で使用されている「ネ」を観察してみると、このような文法レベルでの説明だけでは収まらない用法が認められる。このような「ね・ねえ」について、伊豆原(1994)は談話進行の関わりから次のように述べている。

①引き込み：話し手の持つ判断や情報を聞き手に持ちかけ、聞き手を話に引き込もうとするもの

例[子供相談電話] () 内は子供

回答者：あれはね、親のまま冬を越すからもうそろそろ出てくるとお思いますよ。(はい) ええ、だから水面を少しね、気をつけてください。

②同意求め：話し手の持つ情報や話し手の判断が聞き手のそれと一致すると想定し、それに対して同意を求めるもの

例[子供相談電話] () 内は子供

回答者：朝顔とかあるいはひまわりの花、知ってますか。(知ってます) あれは種がなりますねえ。(うん) ねえ (↙↘)。

③確認求め：情報は聞き手にあり、話し手がそれに対する自分の認識や判断を確認するもの

例[子供相談電話] () 内は子供

回答者：ああそうすると中学校卒業後すぐに(はい)働きに出たわけですね (↙)。(はい、そうです) で、働きに出たのは会社とか…。

伊豆原 (1994) の研究は従来文法レベルでは指摘されてこなかった「ネ」の談話機能を非常に詳細に分け分析したすぐれた研究と言える。しかし、伊豆原 (1994) の研究は談話の中でも会話のやり取り場면을対象にした研究であり、筆者が対象にしている説明的場面とは性格が異なると言える。筆者の扱う説明的場面は、上記したように「会話のやり取りの中で一人の話者が相手の情報要求に対して説明を行っている場面」という限られた場面であり、完全な会話のやり取り場面とは性質が少し異なる。この説明的場面は相手の情報要求によって話者が説明を行っているわけなので、伊豆原 (1994) の「②同意求め」「③確認求め」の場合と違って、話者にのみ情報がある場合が多く、「ネ」はその情報の共有を相手に積極的に求め、確認しながら話を進めるためのディスコースマーカー (談話標識) として働いている。しかし、伊豆原 (1994) では、そのような「ネ」の談話機能については指摘していない。もちろん、伊豆原 (1994) の指摘する「②同意求め」「③確認求め」のように情報が話者、相手両方にある場合と聞き手のみにある場合も説明的場面である程度見られる。これは会話のやり取り場面、説明的場面という性質の異なりはあるが、筆者の扱う説明的場面が会話のやり取り場面の一部、すなわち、会話のやり取り場面の中で相手の情報要求に対して一人の話者が説明を行っている場面を取りあげているからであろう。しかし、これらの用法は話者、相手の情報の量の違いはあるもののいずれも情報の共有を積極的に求め確認し、相手と共有情報のもとで話を進めるためのマーカーとして働いている点は共通していると言える。

そこで、本研究では情報が話者にのみある場合の「ネ」および、伊豆原 (1994) で指摘する「②同意もとめ」のような、情報が話者と相手の両方にある場合の「ネ」とともに、「③確認求め」のように情報が相手のみにある場合の「ネ」の3つを統合し、「情報共有確認」の「ネ」と名付けることにする。さらに、仙台方言の説明的場面における「ネ」は「デショー」「ヨネ」「ッチャ」「ッチャネ」²⁾などで情報の共有を確認した後、さらに情報の共有を確認 (再確認) し、念を押しながら話を進める用法も認められるが、本稿ではそれを「念押し」と呼ぶことにする。

以下、3節では仙台方言の説明的場面で使用される「ネ」の談話機能について、具体的談話資料を提示し考察する。

3. 仙台方言における「ネ」の機能

ここでは仙台方言の説明的場面から認められる「ネ」の機能を考察する。ここで提示する談話資料³⁾は全て仙台方言の説明的場面の談話例である。なお、以下の表の中で①②はポーズ (話題

2) これらの形式は仙台方言の説明的場面で「ネ」とともに、相手に情報の共有を積極的に求め、確認しながら話を進めるための「情報共有確認」マーカーとして働いている。これらの形式については別稿で明らかにする。

3) 本稿で使用する談話資料は次の調査によって採集したものである。

①調査時期：2000年7月～2002年7月

②調査地：宮城県仙台市

が変るポーズよりは短く、語句より長いポーズ) で分けた文の番号であり、文法的には句なし文に対応する。また、1、2 は形式的・意味的に一つの繋がりを持っていると思われる文の番号であり、文法的には文なし文連続に対応する。また、談話資料は方言の談話をカタカナで表記し、その下に共通語訳を附した。

3. 1 引き込み

まず、そこまでの話を相手が理解しているかを確かめ、相手を話の中に引き込みながら話を進めるためのマーカーとして使用される場合である。

談話資料1 日本の文化についての話

(昭和5年生まれ男性 当時71歳 元電力会社勤務)

1	①ダイタイネ ②ニホンノ ブンカッテユーノウネ ③マズ モドオ タダセバ チューゴク ケーユデ カンコグオ トーッテ ニホンニ ハイッテ キタンダカラ ④ホドントノ エ ブンカッテユーノウ
2	④ンダカラネ キューシュードガ アド マ アノ ヘンノウ モドオ タダセバ カンコグノ チダノ ナンダノ センブ マザッテルワゲデショ (ノ) エ
3	⑥ンダガラ カンコグ ケーユデ キタガラネ ⑦マー チューゴグガ モトナンデスケド ⑧カンコグニ キテ シテ カンコグガラ ニホンニ キタガラネ
4	⑨ンダガラ カンコグノ アレデショ (ノ) エ

〈共通語訳〉

- | |
|---|
| ①だいたいね。
②日本の文化というのはね。
③まず、もとをただせば中国経由で韓国をとって日本に入って来たんだから。
④ほとんどの、え、文化というのは。
⑤だからね、九州とか、あと、まあ、あの辺のはもとをただせば韓国の血だの何だの全部混ざっているわけでしょう (ノ)、え。 |
|---|

③調査場所：東北大学国語学研究室、インフォーマントの自宅、仙台市内の喫茶店

④インフォーマント：仙台生え抜きの高年層21名 (50歳以上の男性11名、女性10名)

⑤調査方法：質問による面接調査。すなわち、筆者が直接インフォーマントに会って、地元の方言や名物など、10項目にわたる質問をし、それに対して話者が説明を行っている場面 (説明的場面) を分析対象にした。談話資料は仙台市高年層の談話資料、約23時間程度の録音資料を文字化したものである。

- ⑥だから、韓国経由で来たからね。
- ⑦まあ、中国かもとなんですけど。
- ⑧韓国に来て、そして韓国から日本に来たからね。
- ⑨だから、韓国のあれでしょう（ノ）、え。

談話資料1は日本の文化についての話で、話者は「ネ」を5回使用し、「だいたい日本の文化と
いうのはもとをただせば中国経由で韓国をとって日本に入ってきた」「だから九州などはもとをただせ
ば韓国の血だの何だの全部混ざっている」「日本の文化は中国かもとだけ韓国経由で日本に
来た（から韓国の文化も影響しているのだ）」という話を進めている。ここでは「ネ」が使われなくても
話者の話の意図は相手に十分伝わるが、話者は「情報の内容理解を助ける」「会話者間のやり
取りをよりスムーズにする」「会話者間の人間関係を円滑にする」ため、「ネ」を使い、そこまでの
話を相手が理解しているかを確かめ、相手を話の中に引き込みながら話を進めている。すなわち、こ
こで「ネ」は相手を話の中に引き込みながら話を進めるためのマーカーとして働いているのである。こ
のような用法は次の談話資料2からも認められる。

談話資料2 友達が訪問した時の話

(大正15年生まれ女性 当時74歳 商店経営)

1	①トンデモナイ イブデモ ソンナデネエンダケッド タマニ コー ヤッテサ アノ ヨー ア ル ヒッ キタリ スルカラ ウン ②マエカラ ソー ユンダケッド (笑)
2	③キョー 「カイッカラワ」 ツソーガラ 「カイッテガイワ」 ツツッテ ヤッタ (笑)
3	④イマ ヨー アルノ コツツ
4	⑤イーノ ショツチュー クル ヒトダガラ
5	⑥タノマッテ イル モノ トリニ キタリ スノ ウン
6	⑦ダカラネ ホラ オカシタノサ ナンダイネ
7	⑧ソー タンデ オイデ アド トッテ ヤッテ ソレデ トリニ クンノネ ウン
8	⑨ダガラ ソレダケノ コトナンダゲド ウン アノ ヒトモ イノガスイカラ

〈共通語訳〉

- ①とんでもない、いつでも、そんなじゃないんだけど、たまに、こうやってさ、あの用ある人來たりするから、うん。
- ②前からそういうんだけど。(笑)
- ③今日「帰るわ」というから、「帰って」と言ってやった。(笑)
- ④今用あるの、こっち。
- ⑤いいの、しょっちゅう來る人だから。
- ⑥頼んでいるものどりに來たりするの、うん。
- ⑦だからね、ほら、お菓子だのさ、なんだろうね。
- ⑧そう頼んでおいで、後、とってやって、それでどりに來るのね、うん。
- ⑨だから、それだけのことなんだけど、うん、あの人も忙しいから。

談話資料2は談話資料採録中、友達が訪問したが、インタビューがあるから友達を帰した時の話である。話者はここで「ネ」を3回使うことで、「友達が頼んでいるもの取りに來たりするが、それはお菓子などだ」というそこの話を相手が理解しているかを確認、相手を話の中に引き込みながら話を進めている。ここでも「ネ」は相手を話の中に引き込みながら話を進めるためのマーカーとして働いている。

以上の例のように「ネ」は仙台方言の説明的場面で、そこの話を相手が理解しているかを確認、相手を話の中に引き込みながら話を進めるためのマーカーとして使われている。

この場合の「ネ」はほとんどの場合、イントネーションが上昇しないが、これは以下に述べる「情報共有確認」「念押し」の場合と違って、うなずきやあいづちなどの相手の積極的な反応を必要としないからである。また、この引き込みの場合は、

例) だいたいね、日本の文化というのはね、まず、もとをただせば中国経由で韓国
をとって日本に入ってきたんだから。(談話資料1から)

のように、間投助詞が使われる場合と、

例) そう頼んでおいで、後、とってやって、それでとりに来るのね。(談話資料2から)

のように、終助詞が使われる場合がある。また、談話資料2の①⑦の「サ」(2回)は「ネ」と同様に相手を話の中に引き込むためのマーカーとして使われる。この「サ」は「ネ」より打ち解けた場合に使われる。さらに、仙台方言の説明的場面では次の例のように「ッシャ」も使われるが、この形は「サ」より丁寧な表現である(浅野1985)。

談話資料3 食べ物の保存方法の話

(昭和5年生まれ男性 当時71歳 元電力会社勤務)

1	①ア デモ フソーノ ツケンワ ヤッパリ シ インブンオ ウット ツヨグ シナイド ハル サギマデ オガンナイガラネー エ ②ナガグ モダナイガラネー
2	③ンダカラ マ ナンノ ゴトネー ④シオバ タベテ イルド オナジッシャ エ
3	⑤シャケダッテ ヤー コノ ヘンサ ウッサ クンノ ナンカ ミナー モー レイトー ギジュ ツダノ モー ソノコロ ハッタソシテネ ワレワレ コドモノコロ
4	⑥ンダカラ シオダケデ ミナ ホゾンスルンダイチャ
5	⑦ンダガラ ア コー ヤイダリ スト モー シオ ミナ ギャード テテキテネ
6	⑧イマワ モー ツリトッタノ スグ スグ モー モッテ キテ カテイサ クエバ レイゾー

	コ アル ナニモ アルデネ ホゾンモ キックスネ アルテードワ
7	⑨コンナノ ナガッタガラ ホレ コノ コドモノコロ エー
8	⑩ンダカラ シオツケガ カンソーモ ^{ッシャ} ホラ ヒ フユブンノワネ
9	⑪ンダーラ コドニ サムイ ドゴノ コッチ センダイノ ホーデモ イナガノ ホーダド コイ ナ ホゾンシヨグノ アイツッショ (✓) シオダノネ ナンダノッテ
10	⑫ノノ テンワ イマ アーイッタネ モー ザーット ヤマオクニデモ ナンデモ ミシナ ウリ ニワ イグシネ エ
11	⑬シテ ダイタイ ドーロジジョーガ ヨグ ナッタカラワネ エ

〈共通語訳〉

- ①ああ、でも、もう普通の漬けるのはやっぱり塩分をうんと強くないと、春先まで置かれないからね、え
 ②なかよくもないからね。
 ③だから、ま、なんのことない。
 ④塩を食べているのと同じさ、え。
 ⑤しゃげだつて、やあ、この辺に売りに来るのなんか、皆、もう冷凍技術だの、もうその頃発達してない、われわれ子供の頃。
 ⑥だから、塩だけで皆保存するんだよね (✓)。
 ⑦だから、あ、こう、焼いたりすると、もう塩みなギャーと出てきてね。
 ⑧今はもう釣りとつたの、すぐもってきて家庭にくれば、冷蔵庫もある、何もあつてね、保存きしね、ある程度は。
 ⑨こんなになかったから、ほら、この子供の頃、ええ。
 ⑩だから、塩漬けか乾燥ものさ、ほら、冬分のはね。
 ⑪だから殊に寒いとこの、こっち仙台の方でも田舎の方だとこんな保存食のあいつでしょう (✓)、塩だのね、何だのって。
 ⑫その点は今あのようなね、もうぎあつと山奥にでもなんでもみんな売りに行くしね、え。
 ⑬そして、だいたい道路事情がよくなったからね、え。

談話資料3は食べ物の保存方法についての話で、話者は「ッシャ」を2回使うことで、相手を「(普通、漬物をつける時は塩分を強くないと春まで長く保存できないから塩をたくさん使うのだ)だから、その漬物を食べるのは塩を食べているのと同じだ」「(その当時は冷凍技術など発達してなかったから)冬食べるものは塩漬けか乾燥したものだ」という話の中に引き込みながら話を進めている。この場合、「サ」「ッシャ」は「ネ」と同様に間投助詞、終助詞が使用される。

3. 2 情報共有確認

次は、情報の共有を相手に積極的に求め、それについて確認することで相手と情報共有のもとで話を進めるためのマーカーとして使われている場合である。

談話資料4は子供の時の遊びについての話で、話者は「私ら小学校の時11銭2銭というお金だったけど、その1銭2銭の頃、電車に乗ると5銭なのだ」ということを述べ、「ネ (✓)」でその情報の

共有を積極的に求め、それについて確認することで相手と情報共有のもとで話を進めている。すなわち、「ネ（↗）」は情報の共有を相手に積極的に求め、それについて確認することで相手と情報共有のもとで話を進めるためのマーカーとして使われる。このような用法は次の談話資料5からも認められる。

談話資料4 子供の時の遊び（水遊び）についての話

(大正15年生まれ的女性 当時74歳 商店経営)

①	①デ ミンナ ナカナカ イカナインダヨネ(↗)
	②アノ イクト ユーノワ ソンナ コト ユート ワルインダケド
②	③ナツヤスミニ ハイッテ ナンガツカラ ナンガツ ナンニチカラ ナンニチマデ トオカカンデ イマダラ ジューマンタン トラレルンダヨナイ ジューマン タンイ
③	④ワタシラ ショーガッコーノ トキワ アノ イッセン ニセンッテ オカネダッタノ ⑤イマ イチエンッテ コトサ
④	⑥ソノ イッセン ニセンノ コロ デンシャニ ノルト ゴセンナヨ <u>ネ</u> (↗) ⑦ゴセンナノ
⑤	⑧ルガ アサ イチジ マエダト ヨンセンナノ
⑥	⑨デ ヒロセガワワネ アソコデ ボート コグノワ イチジカン ゴジュッセン
⑦	⑩ダカラ ボートワ タカカッタネ チョットネ ソノ コロワネ
⑧	…

〈共通語訳〉

- ①で、みんな、なかなか行かないんだよね(↗)。
 ②あの、行くというのはそんなこと言うと悪いんだけど。
 ③夏休みに入って、何月から何月何日から何日まで十日間で、今だったらやっぱり十万円とられるんだよね(↗)、十万円。
 ④私ら小学校の時は、あの、一銭二銭ってお金だったの。
 ⑤今、一円ってことさ。
 ⑥その一銭二銭の頃、電車に乗ると五銭なのよ、ね(↗)。
 ⑦五銭なの。
 ⑧それが朝一時前だと四銭なの。
 ⑨で、広瀬川はね、あそこでボート漕ぐのは一時間五十銭。
 ⑩だから、ボートは高かったね、ちよつとね、その頃はね。

談話資料5は泳ぎを覚えた時の話で、話者は「ネ（↗）」で「漁師さんはか地引きだのする人だ」という情報の共有を積極的に求め、それについて確認することで相手と情報共有のもとで話を進めている。

談話資料5 泳ぎを覚えた時の話

(大正15年生まれ的女性 当時74歳 商店経営)

1	①アノネ ウミサ ウミニ イッテ オボエダノ ワタン
2	②ダカラ チョット カワニ キタ ドギ チョット コワイナート オモッタゲド センタクイダデ オボエダノヨ
3	③ウミニ イッテ アノ アノ リョーシサンニ (リョーシサン) ガ ヨグ アノ アノ ナンテ ユーンダヨ ④リョーシサン アレワ ナンダヨ
4	⑤ナニガ ジビキダノ スル ヒト <u>ね</u> (ノ)
5	⑥ノレニ ノセラレテサ ⑦ノセテッテ モラッテ トチューガラ ポント ナゲランノ ウミサ
6	⑧ワタンガ ナゲラレルノサ ⑨オボエルヨーニッテ
7	⑩ノシテ ソコカラ コーシデ オボエダノ

〈共通語訳〉

①あのね、海に、海に行って覚えたの、私。
②だから、ちょっと川に来た時、ちょっと怖いなあと思ったけど、洗濯板で覚えたのよ。
③海に行って、あの、あの、漁師さんに(漁師さん)がよあの、あの、何というんだよ。
④漁師さん、あれは何だよ。
⑤何か地引きだのする人、 <u>ね</u> (ノ)。
⑥それに乗せられてさ。
⑦乗せてもらって、途中からぼんと投げられるの、海に。
⑧私が投げられるのさ。
⑨覚えるようになって。
⑩そして、そこから、こゝして覚えたの。

以上の例のように「ネ (ノ)」は情報の共有を相手に積極的に求め、それについて確認することで相手と情報共有のもとで話を進めるためのマーカーとして使われる。この場合、「ネ (ノ)」はうなずきやあいづちなどの相手の積極的な反応を必要とするので、必ず上昇イントネーションで現れる。それは、次の節で述べる「念押し」の機能を持っている場合も同じである。なお、情報共有確認の場合は、

例) その1銭2銭の頃、電車に乗ると5銭なのよ、ね (ノ)。(談話資料4から)

のように感動詞が使われる場合と

例) 一番きれいなのはね。

日本で北海道なんだってよ、言葉は。

だからね、北海道に先外人のいらいっしゃるでしょう (✓)。

そして、東京に来たら、また苦労するんだってね (✓)。

(仙台方言の談話資料から)

のように終助詞が使われる場合がある。

3. 3 念押し⁴⁾

最後に、情報の共有を再確認し、念を押しながら話を進めるためのマーカーとして使われる場合である。

談話資料6 仙台の天気についての話

(大正15年生まれ女性 当時74歳 商店経営)

1	①ワダンワ ナレデッカラ ソー オモフナイゲド ②ヤッパリネ アノー ホラ アッチノ ヒトワ トーキョーダノ ムゴーカー クルドネ ③ントー ④ナンテ ユノ ⑤サムイネーッテ ユー ヒトモ イルンダヨネ (✓)
2	⑥ユギワ ナイガラ イーンダヨ ⑦ユギ ナシ
3	⑧カンコグワ ユギ フルツチャネ (✓) ⑨ンネ (✓)
4	⑩ユギワ アンマリ ナインダ
5	⑪シェージェー フツモサ ニジュッセンチグライカネ
6	⑫ヨコハマダッテ ファンナイヨネ (✓)

4) 「引き込み」形式の場合、そこまでの話を相手が聞いているのか、理解しているのかを確かめ、相手を話の中に引き込みながら話を進めるために使われる用法で、相手の積極的な反応がなくても話は進められる。したがって、イントネーションがほとんど上昇しない。しかし、「情報共有確認」「念押し」の場合、情報の共有を積極的に求め、確認を行い、情報共有のもとで話を進めるための用法で、相手の積極的な反応がないかぎり、話は前に進まない。このように、「情報共有確認」「念押し」の場合は相手の積極的な反応を要求するので、必ず、上昇イントネーションで現れる。「情報共有確認」と「念押し」の違いは「念押し」は「情報共有確認」の後、重ねてその情報の共有を確認するという点で異なる。

〈共通語訳〉

- ①私は慣れているからそう思わないけど
- ②やっぱりね、あのう、ほら、あっちの人は東京など、向こうから来るとね
- ③うんと
- ④なんというの
- ⑤「寒いねえ」って言う人もいるんだよね (✓)
- ⑥雪はないからいいんだよ
- ⑦雪ないし
- ⑧韓国は雪降るよね (✓)
- ⑨ね (✓)
- ⑩雪はあんまりないんだ
- ⑪せいぜい降ってもさ、二十センチぐらいかね
- ⑫横浜だって降らないよね(✓)

上の談話資料は仙台の天気についての話で、話者は「ッチャネ (✓)」で「韓国は雪が降る」という情報の共有を確認しながら話を進めている。さらに、話者は「ネ (✓)」を使うことでその情報の共有を再確認、念を押しながら話を進めている。ここで「ネ (✓)」は情報の共有を重ねて確認、念を押しながら話を進めるためのマーカースとして使われている。このような用法は次の談話資料7からも認められる。

談話資料7 日本の経済についての話

(昭和1年生まれ男性 当時74歳 元電力会社勤務)

1	①ダガラ アノネ ウ アノ センゴネ アノー イワユル ケ ケイザイ ジーピーエヌ ユーネ <u>~~~~~</u> ダッタワ ニホン ソノ ツギカンコク マタワ タイワンナンダヨ ②ネ (✓)
2	③ダガラ イチオー アメリカワ モー ベツダヨ ④ <u>~~~~~</u> ドルダゲダガラ
3	⑤ダーラ ヨーロッパッテユー クニワ マー ゴゾンジノーニ イーユドガ ナンカデ ヤッテルデショ (✓) ⑥ <u>ネ</u> (✓) ⑦ユーロッパッテユー カネ ツカッテ イルデショ (✓) ⑧ <u>ネ</u> (✓)
4	⑨アレワ ホレ イワユル ニホンダノ アメリカニ タイコーテギネーガラ セメデ オー シュー ナンカコグデ マドマッテ ヤローデアネーガト ユー ゴドデ

*~~~~~部分は聞き取りが困難ないしは不能な箇所。

〈共通語訳〉

- ①だから、あのね、あの戦後ね、あのう、いわゆる経済GNPというね、 だったのは、日本、その次韓国、または台湾なんだよ。
- ②ね (✓)。
- ③だから、いちおう、アメリカはもう別だよ。
- ④ドルだけだから。
- ⑤だから、ヨーロッパという国は、まあ、ご存知のようにEUとかでなんかでやってるでしょう (✓)。
- ⑥ね (✓)。
- ⑦ユーロという金使っているでしょう (✓)。
- ⑧ね (✓)。
- ⑨あれは、ほら、いわゆる日本だのアメリカに対抗できないからせめて欧州何ヶ国でまとまってやろうじゃないかということで。

談話資料7は日本の経済についての話で話者は「デショ」(✓) (2回)で「ヨーロッパという国はご存知のようにEUとか何かでやっているのだ、ユーロというお金を使っているのだ」という情報の共有を確認しながら話を進める。さらに、話者は「ネ」(✓) (2回)を使用することで、情報の共有を重ねて確認し、念を押しながら話を進めている。ちなみに②では「ネ」(✓)で「戦後、いわゆる経済GNPというのは、日本、その次、韓国、または台湾の順だ」という情報の共有を相手に積極的に求め、確認しながら話を進めている。

以上の例のように「ネ (✓)」は情報の共有を重ねて確認し、念を押しながら話を進めるためのマーカーとして使われる。この場合の「ネ (✓)」も相手の積極的な反応を必要とするので、必ず上昇イントネーションで現れる。さらに、念押し「ネ(✓)」は、

例) 韓国は雪降るツチャネ (✓)、ネ (✓)。(談話資料6から)

のように「ツチャネ(✓)」などで情報の共有を確認した後、さらに情報の共有を確認し念を押す形式なので、常に感動詞が使われる。

4. まとめと今後の課題

以上、仙台方言の説明的場面で使用される「ネ」の談話機能を考察した。その結果、「ネ」には次のような機能が認められることが明らかになった。

①引き込み

そこまでの話を相手が理解しているかを確認、相手を話の中に引き込みながら話を進

めるためのマーカ―として働いている。この「引き込み」マーカ―として、「サ」「ッジャ」も使用されるが、「サ」は「ネ」より打ち解けた場面で、「ッジャ」は「サ」より丁寧な場面で使用される。

②情報共有確認

情報の共有を相手に積極的に求め、それについて確認することで相手と情報共有のもとで話を進めるためのマーカ―として働いている。

③ 念押し

情報の共有を再確認、念を押しながら話を進めるためのマーカ―として働いている。

以上で述べてきた「ネ」には、大きく相手の反応を必要とする場合と必要としない場合がある。これは大体イントネーションで判別されるが、相手の反応を必要とする場合は必ず上昇イントネーションで現れる。それは、「情報共有確認」「念押し」の機能を持っている場合である。なお、「情報共有確認」の場合は感動詞が使われる場合と終助詞が使われる場合がある。また、「念押し」の場合は情報の共有を確認した後、さらに情報の共有を確認し念を押す形式なので、常に感動詞が使われる。一方、相手の反応を必要としない場合、「ネ」はほとんどの場合、イントネーションが上昇しない。それは、「引き込み」の機能を担っている場合である。この「引き込み」の場合は間投助詞が使われる場合と終助詞が使われる場合がある。

このような「ネ」の機能が果たして東京をはじめとする他の地域の談話資料でも認められるのかを明らかにするため、今後さらに地域を広げ、考察を進めることが課題として残されている。また、仙台方言の説明的場面で多用される他の談話標識にも注目し、今後、取りあげていくことが必要である。

【参考文献】

- 浅野健二編 (1985) 『仙台方言辞書』東京堂出版
- 伊豆原英子 (1994) 「感動詞・間投助詞・終助詞『ね・ねえ』のイントネーション—談話進行との関わりから—」『日本語教育』83
- 琴鍾愛 (2005) 「日本語方言における談話標識の出現傾向—東京方言、大阪方言、仙台方言の比較—」『日本語の研究』1-2
- 田窪行則 (1992) 「談話管理標識について」『文化言語学—その提言と建設—』三省堂
- 陣常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6-10 明治書院
- 西野容子 (1993) 「会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」『日本語学』12-5 明治書院
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2000) 『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 藤原与一 (1982、1985、1986) 『方言文末詞の研究上・中・下』春陽堂書店
- 藤原与一 (1990) 『文末詞の言語学』三弥井書店
- 三牧陽子 (1993) 「談話標識の種類」『視聴覚教材と言語教育』6大阪外国語大学AV技法研究会
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- Bruce, Fraser. 1990 “An approach to discourse markers”, *Journal of Pragmatics*14.
- Deborah, Schifffrin. 1987 “Discourse markers”, Cambridge University Press.

要 旨

筆者は現在まで談話標識の出現傾向から各地域の談話資料を分析し、談話展開の方法に地域差が認められることを明らかにした。今回はこのような談話標識の出現傾向に注目するのではなく、その一つ一つの談話標識が実際の談話の中でどのように働いているのか、その機能を考察した。本稿では、まず研究の第一歩として仙台方言の説明的場面で最も多用される形式である「ネ」を取りあげ、その談話機能を考察した。

検討の結果、仙台方言の説明的場面で使用される「ネ」には次のような機能を認められることが明らかになった。

①引き込み (問投助詞、終助詞)

そこまでの話を相手が理解しているかを確かめ、相手を話の中に引き込みながら話を進めるためのマーカーとして働いている。この「引き込み」マーカーとして、「サ」「ッシャ」も使用されるが、「サ」は「ネ」より打ち解けた場面で、「ッシャ」は「サ」より丁寧な場面で使用される。(ほとんどの場合、イントネーションが上昇しない)

②情報共有確認 (終助詞、感動詞)

情報の共有を相手に積極的に求め、それについて確認することで相手と情報共有のもとで話を進めるためのマーカーとして働いている。(必ず、上昇イントネーションで現われる)

③ 念押し (感動詞)

情報の共有を再確認、念を押しながら話を進めるためのマーカーとして働いている。(必ず、上昇イントネーションで現われる)

このような「ネ」の機能が果たして東京をはじめとする他の地域の談話資料でも認められるのかを明らかにするため、今後さらに地域を広げ、考察を進めることが課題として残されている。また、仙台方言の説明的場面で多用される他の談話標識にも注目し、今後、取りあげていくことが必要である。

キーワード：談話標識「ネ」、仙台方言、説明的場面、引き込み、共有情報

투 고 : 2008. 5. 31
1차 심사 : 2008. 6. 14
2차 심사 : 2008. 6. 28

住 所 : (302-777) 대전광역시 서구 둔산동 908 샘머리 아파트 218동 1902호

電 話 : 042-863-9554

e-mail : sususii@hanmail.net